

東京国立博物館等の観覧料金の改定について

- 1 東京国立博物館（以下「東博」）は、昨年2月に、全ての来館者が快適な鑑賞環境の下で豊かな文化的体験ができる博物館を目指し、来館者サービスの充実を主な内容とする「トーハク新時代プラン」（別添資料）を発表しました。

現在、東博では、同プランに基づき、展示解説の充実（多言語対応を含む）、映像等を活用した新感覚の展示の拡大、「見せる修理所」の新設、通年開放を目指した庭園の整備、休憩スペースのリニューアルなど、様々な改革に一斉に着手しています。

- 2 一方、同プランは、こうした改革プランを強力に推進しつつ、貴重なコレクションを次代の国民と世界の人々に確実に継承できる財務基盤を整備するため、「基本料金の引き上げなど、入館料の見直しを検討」することも、合わせて表明しました。

その後1年近くをかけ、外部有識者の方々から意見を聴取しながら、慎重に検討を進めた結果、平成18年以来約14年ぶりとなる観覧料金の全面的な見直しを行い、本年4月1日に以下の通り改定を行うこととさせていただきましたので、お知らせいたします。

（1）現 行：

【特別展】…………… 主に平成館で年5～6回開催。展覧会ごとに共催団体である新聞社等と協議して観覧料金を個別に設定（おおむね以下の通り）。

- | | |
|-------------|-----------------------|
| ・ 一 般（シニアも） | 1, 6 0 0 円～1, 7 0 0 円 |
| ・ 大学生 | 1, 1 0 0 円～1, 2 0 0 円 |
| ・ 高校生 | 7 0 0 円～ 9 0 0 円 |
| ・ 中学生以下 | 無料 |

【総合文化展】… いわゆる平常展。本館・東洋館・法隆寺宝物館など5展示館で開催。展示替えを展示室単位で年間延べ300回程度実施。

- | | |
|--------------------|---------|
| ・ 一 般 | 6 2 0 円 |
| ・ シニア（満70歳以上） | 無料 |
| ・ 大学生 | 4 1 0 円 |
| ・ 高校生以下（および満18歳未満） | 無料 |

(2) 改定内容：

今回の改定は、【総合文化展】を対象に、

- ① 一般（620円）は、来館者サービスの一層の充実を進めつつ、展示のランニング・コスト等を考慮して、1000円に改定いたします。
- ② 大学生（410円）は、500円に改定いたします。なお、大学単位で会員になると教員・学生が無料になる「キャンパスメンバーズ制度」は継続いたします。
- ③ シニアと高校生以下（および満18歳未満）の無料措置は継続いたします。
- ④ 団体料金（20名以上を対象に、通常料金から100円割引）は、利用率が低いので、廃止いたします。

(3) なお、年会費をいただいている各種会員制度については、利用者への周知期間を十分に確保する必要がありますので、さらに1年後の令和3年4月を目途に新料金に移行することとし、その内容は本年3月末を目途に追加して発表いたします。

3 質量ともに我が国最高水準のコレクションを誇る東博は、この貴重なコレクションを次代の国民と世界の人々に継承する使命を担っています。今回の改定は、東博がこの重大な使命を将来にわたって持続的に果たすことができるよう、国（すなわち全国の国民の皆様が納める税金）による支援に加えて、来館者の皆様にも一層のご支援をお願いするものです。

4 なお、本機構が運営する東博以外の国立博物館も、昨年10月にそれぞれ改革プランを公表しており、東博と同様の理由から本年4月1日に観覧料金の改定を行うことにしています。

その際、各館の運営実態や地域の実情も考慮し、京都国立博物館と奈良国立博物館は、一般は700円に、大学生は350円に改定いたします（九州国立博物館は検討中）。また、本機構が運営する奈良文化財研究所の展示施設である飛鳥資料館も、一般を350円に、大学生を200円に改定いたします。

5 以下、今回の見直しに至った東博の現状と背景について、ご説明いたします。

国宝・重文の1割が東博に

東博には、明治5年（1872年）の創立以降150年の歩みの中で収蔵してきた膨大なコレクションがあります。その数は、館蔵品が約12万件、寄託品が約3000件に上り、今なお寄贈等によって毎年100件前後増え続けています。

また、これらの文化財のうち1000件余りが国宝・重要文化財に指定されており、我が国の国宝・重要文化財（美術工芸品）10735件（平成31年（2019年）1月1日現在）の約1割が東博1館に収蔵されていることとなります（東博を含む国立博物館4館全体では約2割を収蔵）。

東博は、質量ともに我が国随一のコレクションを有する博物館として、国の貴重な文化財を保存・公開・活用しながら、次代の国民と世界の人々に確実に継承するという特別な使命を担っているのです。

修理の順番を待つ文化財

東博が担う使命のうち「保存」とは、単に温湿度が管理された収蔵庫に文化財を保管しておけばよいというものではありません。一点一点の文化財ごとに学術的な調査を行い、画像データを収集することに始まり、さらに劣化の状況を定期的に点検して、その結果に応じて応急修理や本格修理の優先順位を決定し、実施に移すといった、緻密で根気を要する作業の積み重ねでなり立っているのが、「保存」の作業の実際なのです。

現在、東博では、展示のための年間約 500 件の応急修理と、保存のための年間約 100 件の本格修理（百年に 1 回を目途にしています）を計画的に進めていますが、コレクションがあまりにも膨大であるがために、多くの収蔵品が修理の順番を待っている状況にあります。より多くの収蔵品の公開を実現させるとともに、次代への継承をより確実なものとするためには、修理件数をさらに拡大していく必要があります。

年間 300 回を数える展示替え

東博が担う使命のうち「公開」の中核を担っているのが、年間を通じて東博内の 5 つの展示館で行われている総合文化展です。総合文化展では、常時 3,000 件の文化財が展示されていますが、これを「常設展」と呼ばないのは、年間延べ 300 回にも及ぶ展示品の入替えを展示室単位で行い、その結果、年間約 1 万件の文化財を展示することとなっていて、決して「常設」ではないからです。

このような頻繁な展示替えが必要なのは、日本や東洋の美術品の多くが素材的に大変脆弱で、温湿度や光などの変化に大きく影響を受けるため、素材の種類に応じて展示期間に制限を設ける必要があるからです。例えば絵巻や水墨画は、6 週間展示すると、その後 1 年半は展示することができません。

その結果、総合文化展に来るたびに違う文化財に出会えるのが東博の大きな魅力の一つとなっていますが、担当の研究員が直接行う展示替えの作業に要する時間と労力は、欧米の博物館では考えられないことです。

文化財の「活用」という新たな取り組み

文化財の「活用」は、子供たちや外国人も含めてすべての人々が日本の文化財に親しむ機会を拡大するための東博の新しい使命です。東博では、一昨年（平成 30 年）7 月に発足した文化財活用センターと連携して、文化財を活用した様々な体験型展示などに取り組んでいます。

例えば、テレビ番組とのコラボで美術品の複製や映像・音声を使った体験型展示（「トーハク×びじゅチューン！なりきり日本美術館」平成 30 年（2018 年））、高精細複製品とプロジェクション・マッピングを用いてガラスケース無しでじっくりと鑑

賞できる展示（「高精細複製品によるあたらしい屏風体験『国宝 松林図屏風』平成 31 年（2019 年）」、高精細画像と大型の 8 K モニターを使って文化財の細部を自由に拡大して鑑賞できる展示（「8K で文化財『国宝 聖徳太子絵伝』令和元年（2019 年）」などの新しいタイプの展示を展開しています。

今後も、新しい博物館体験ができる博物館を目指して、東博の取り組みは続きます。

トーハク新時代プラン

体験型展示を含め、来館者目線に立った新時代の東博を目指して昨年 2 月にまとめられたのが、「トーハク新時代プラン」です。

同プランでは、多言語対応の充実など「世界に開かれた博物館としての取り組み」、映像等を活用した新感覚の展示や見せる修理所など「付加価値の高い多彩なプログラムの提供」、展示室のリニューアルや庭園の整備など「快適な観覧環境の実現」、といった様々な改革プランが提起されています。

同プランを受けて、現在、東博では、来館者サービスや館内環境を全面的に見直し、改善のための作業に一斉に着手しています。

同プランの実現のための財源としては、国からの支援とともに、今回改訂される来館者からの入館料収入が充てられることになります。

来館者数の急増と収支の課題

近年、東博の来館者は、劇的に変化しています。

総合文化展の来館者数は、平成 23 年までの年間 30 万人台から、平成 29 年（2017 年）には年間 100 万人を超えるなど、急増しています。また、日本人だけでなく外国人観光客の来館者も増え、有料入館者の半数以上が外国人となるなど、名実ともに世界に開かれた博物館となってきました。

ただ、その一方で、総合文化展の現在の観覧料金が、来館者一人当たりの直接的なランニング・コスト（光熱水・館内案内・環境整備・設備維持など）さえも賄えない水準にとどまっているために、結果的に「保存」等の他の使命を圧迫することにもなっています。

東博が、新時代の博物館像を目指した挑戦を続けながら、本来担うべき様々な使命を十全に果たしていくためには、総合文化展の観覧料金の見直しが不可避な状況となっています。

東京国立博物館「トーハク新時代プラン」

オリパラ東京大会を来年に控え、東京国立博物館（トーハク）は、「日本博」等を通じて、日本の文化を世界へ発信するための中心的な役割が期待されている。また、2022 年には、開設 150 周年の節目の年を迎える。

日本で最も長い歴史を誇る博物館であるトーハクは、新しい取り組みに挑戦する博物館でもある。「日本の文化を未来と世界につなげる博物館」を目指し、トーハクは、以下のプランの実現に挑戦する。

1 世界に開かれた博物館としての取り組み（多言語対応の改善・充実）

- （プラン①）外国人にもわかりやすい展示解説の工夫
- （プラン②）多言語対応型の新しい鑑賞ガイドアプリの導入
- （プラン③）外国人を対象とするガイドツアーの拡充

2 付加価値の高い多彩なプログラムの提供

- （プラン④）レプリカ・VR・8K映像等を活用した新感覚の展示の拡大
- （プラン⑤）展示と連動した日本文化体験プログラムの拡充
- （プラン⑥）「見せる修理所」の開設とバックヤードツアーの本格導入
- （プラン⑦）庭園を全面改修して通年開放を実現

3 快適な鑑賞環境の実現

- （プラン⑧）展示ケース・照明・内装など展示室の全面リニューアル
- （プラン⑨）デジタルサイネージの導入など館内案内（サイン）の刷新
- （プラン⑩）早朝開館・夜間開館など開館時間の柔軟な設定
- （プラン⑪）カフェの増設と休憩スペースの整備

4 プランを実現するための基盤の確保

- （プラン⑫）スタッフの確保と研究活動の推進
- （プラン⑬）入館料の見直しの検討